

大海^{だいかい}を以^{もつ}て
牛跡^{ごしやく}に内^いれることなかれ



インドに行くと大地に牛の足跡がある。経典はそれを見逃さず、そこには海の水は入らないという。愚かな行為であると。

表題は維摩經ゆいまききょうの中に出てくる言葉である。「大海原の水を牛がつけた小さな足跡に押し込むようなことはするな」

維摩經が成立したのは西暦後一世紀ごろといわれており、釈尊没六、七百年後である。初期の大乗經典に属する經である。維摩經は徳太子による注釈ぎしよ（維摩經義疏）もあり、日本では古くから親しまれている經の一つである。

筆者は維摩經研究の第一人者である故橋本芳契先生（一九一〇—二〇〇一）から、この經の一字一句を昭和五十年頃二年半にわたり、一対一で教えていただいた。そのときの録音記録（二時間テープで三二本）、を起こし十数年前に『維摩經講話』（山喜房佛書林刊）として上梓した。

お経は釈尊の教えを物語として展開するのが一般的な形式であるが、維摩經では、よこれを離れたきよらかな人であるという評判の在家の維摩居士と智慧もんじゆほさつの文殊菩薩の二人を軸として、仏の悟りとはなにかが、舞台を変え登場人物を変え語られる。經に入る者は舞台で演じられる芝居を見ることになる。

維摩經の舞台は東北インドの地方都市、ヴェーシャリーである。

菩薩數万人とマンゴーの林にいたお釈迦様は維摩居士が病になったことを神通力で知る。

なぜ維摩は病氣になったのか。それは、「衆生病む故に我病む」からであると。お経にはときどきとても恐ろしいことが書かれているが、これもその一つに違いない。

身内や友人や近しい人が病むときは確かにつらく苦しいことはあるが、ここでは「衆生」、つまり「生きとし生ける全ての人」が病んでいるので、自分も病に落ちたのだといっている。

お釈迦様は維摩の見舞いに行ってくれないかと、まず、十大弟子にいう。

見舞いに行けといわれた弟子はみな「私はとてもあんなおそろしい人のところには行きません」と断る。それは、かつて弟子のだれもが修行や托鉢や戒律のことで、維摩居士に徹底的にやりこめられたことがあったからである。

表題の「大海を以て牛跡に内るることなかれ」は、説法第一の富楼那ふろうなのところに出てくる。説法とは人に何事かを教える行為である。

富楼那が説法していると維摩がやってきて「おまえは何をしているのか」。

富楼那「はい、説法をしています」。

維摩「お前のような説法ならしないほうがいい」。

お前の説法は、無限に変化する大海原の水を狭い牛の足跡に押し込もうとしているよ
うなものだ、太陽の光を蛍の灯りと同じと見るようなものだ、大きな道を行こうとして
いる人に小さい道を示しているようなものだ。

そんなことをして何になる。

見事な教育論である。

インドを旅していると牛をいたるところで見る。右の喩えの「牛の足跡」は本当によ
く分かる。インドの喩えは的確で直截的である。

十代弟子全てが見舞いを辞退した後、お釈迦様は次に菩薩方に見舞うよう言われる。
菩薩四人も維摩の論に抗えなかったいきさつを説明し、同じく辞退する。最後に、それ
ではと文殊菩薩が立ち上がり、維摩の待つ方丈の間に向かう。

維摩経はこのあといくつものドラマティックな展開を見せる。

(二〇〇七年四月二五日)